

博物館学課程

— 理論から実践までを統合して共に学ぶ

和洋女子大学日本文学文化学類 教授

駒見和夫 (こまみ かずお)

Profile — 駒見和夫

東洋大学大学院文学研究科修士課程修了。専門は博物館学，日本考古学。著書は『博物館教育の原理と活動：すべての人の学びのために』（学文社），『だれもが学べる博物館へ：公教育の博物館学』（学文社），『幻の国府を掘る：東国の歩みから』（共編著，雄山閣出版），など。



和洋女子大学の博物館学課程では，講義から実務実習までを，履修学生のすべてが同じカリキュラムのもとで一体化して学ぶ学芸員養成教育に取り組んでいる。ここには附属博物館の和洋女子大学文化資料館（博物館相当施設指定）があり，その活動に学生の実践学習を組み入れることによって，統合的な養成教育が可能となっている。

本学の博物館学課程では5学類の多様な分野の学生が受講し，履修は2年次から始まる（図1）。3年次までは講義系科目を学び，4年に実習を行う。学芸員養成教育では学修のまとめとして『博物館館務実習』が課せられており，多くの大学では公・私立の登録博物館や博物館相当施設に依頼して1～2週間の実習が行われる。この場合，実習カリキュラムは各館で設定されるため内容の差異が大きく，大学での理論学習との関連が見出しがたい例もみられる。本学ではこの館務実習を文化資料館

で全員が行うことを原則とし，資料館では学芸員養成教育への貢献を活動目的の一つに掲げ，館務実習のカリキュラムを講義学習と関連づけて組み立てている。あわせて，2～3年次の講義系科目ではこの実習内容も意識して進める点に配慮し，また学習知識を実際に認識できるように，館の収蔵資料や設備機器を教材とする機会も多い。つまり，学生の思考のなかで理論学習と実務体験が有機的に結びつき，博物館と学芸員職の理解を深めることを意図しているのである。この点は，博物館学の課程責任者が資料館運営を兼務する組織体制をとっていることが有益に作用している。

博物館には多様な館種があり，学芸員の職務は幅広い。大学の養成教育では，各種の博物館と学芸員職に関する知識を身につけ実態を知ることは大切であり，その点で学外に出て公・私立の博物館で行う館務実習は意義があろう。け

れども，館務実習も含めて明確な道筋と教育姿勢を定め，統合的な学習に導くことが実践力を高めるうえでより有意義と思われる。

本学での博物館実習について記すと，例年40人程度が受講し，4年次前期に実習Ⅰ，後期に実習Ⅱ（館務実習）の配置である。ともに習得理論の実践学習と位置づけ，文化資料館での企画展開催を目標に据え，資料収集から展示の企画・設営・運営・撤去に至る実践をカリキュラムの中心に据えている。学生の学修成果展となるこの展示は，12～1月に開催される。

企画展開催への取り組みは3年次の12月にスタートする。博物館教育論の授業のなかで，まずは企画展の大まかなテーマを決める。実習での扱い易さの点から題材を民具資料に定めているが，どのような民具に視点を据えるか学生の意見を集約し，教員のアドバイスを交えながら実践条件を勘案して決定する。2013年度を例にとると「顔や表情をもつ民具」がテーマとなり，春季休暇に38人の履修学生が各自で資料収集にあたった。

4年次の実習Ⅰは各学生の収集資料を教材として，博物館資料の受け入れと整理の実務を行った後，資料をもとに展示企画の立案を進めていく。企画立案は，展覧会名，展示のねらいと内容を中心

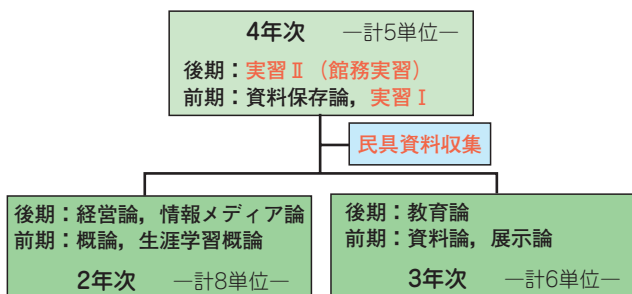


図1 履修のフローチャート

に協議してまとめる。企画の協議は、収集資料を分類して学生を4～5グループに分け、それぞれでの話し合いと全体協議を重ねてまとめる方法をとっている（写真1）。収集資料で不足な部分は、文化資料館の収蔵品から抽出して展示構成を決める。



写真1 展示企画立案の話し合い

多人数で企画を練り上げていくため、意見衝突もしばしばあって一本化が容易ではない。話し合いはいつも20時間以上を要し、授業外でも学生が自主的に協議しなければ意見統一は難しい。2013年度では、約25時間の議論を経て、開催要領『にらめっこしましょ！——表情のある民具たち』ができあがった。地域色豊かで多様な民具の表情にひそむ人びとの願いや想いを知り、民具の魅力に触れてもらうのがねらいである。

後期の実習Ⅱ（館務実習）は、文化資料館を活用して各種資料や展示の機器・仕器の取り扱いを学びながら、企画展の準備作業を進めていく。ポスターをそれぞれ作成して内外に掲示するとともに、各グループが分担して展示図面を完成させ、11月中旬から展示設営に取り掛かる（写真2）。設営は全体がまとまることに気を配



写真2 展示設営

り、相互評価による見直しも随時加え、25時間近くかけて約120m²のスペースの展示を完成させる。また、開催に合わせ学生食堂とコラボして、「味と香りで楽しむ民具展」という企画展関連メニューを学生が提案することも試みている。五感に訴える展示を意図したプログラムの一つで、附属の大学博物館だからこそこできる取り組みである。

企画展が始まると、会場を使って観覧者サービスに関する実習を行うとともに、博物館学課程の2・3年生や一般の団体見学者への展示解説を実践する（写真3）。約1ヵ月半の会期中、ほぼすべての学生がこの実践経験を積むこととなる。自らの手で企画から作り上げた展示には愛着が深く、会期中の様子を足しげく見に来る履修学生が多い。こうして会期が過ぎ、1月下旬に全員で展示を撤去して、最後に実習全体をそれぞれが評価・省察する報告会を行い、3年間にわたる理論から実践までの学芸員養成の学びが終了する。

毎年の報告会では、講義で学んだ理論的な内容と文化資料館での実習が関連深く位置づいている点、実践力を身につけることに結びついたと評価する意見を多くの学生が述べている。さらに、すべ

での履修学生の協働で展示の企画を練ってまとめあげ、設営から撤去までの活動を実践したことにも、実社会の多様な場で活かせる経験が積めたとして高い満足度と充実感が示されている。全学生に統一的なカリキュラムで実施する学芸員養成教育の成果と思われる。

資格取得後、博物館関係の仕事に就く学生は嘱託の展示解説員など毎年1～2人でしかなく、学芸員での就職はほぼ皆無で、その門戸は極めて狭い。2008年度の文科省調査によると、資格取得学生の博物館への就職率はわずか0.6パーセントだという。本学で履修開始時に実施するアンケート調査では、履修動機が学芸員職に対する強い関心ではなく、自己のスキルアップや進路選択肢の幅を広げるために資格を取得したいとする学生が約半数を占める。決して望ましい傾向ではないが、学芸員への就職が困難な状況にあり、一方において教養教育が重視される現在の大学においては、このような学生ニーズに応えることも大切であろう。その点で、統一的カリキュラムで共に学ぶ学芸員養成は、学生のキャリア学習に資するうえでも意義があると考えている。



写真3 展示解説の実践